

薬害肝炎東北原告 阿部代子

「生きているから言えること」

1987年9月 初めての出産は帝王切開でした

出産後 麻酔が切れ始め付き添っていた母に

「ねえ、お尻がぬるぬるしてるんだけどオシメ変えてよ」

掛ふとんをめくった母の「なんだべえ！」という悲鳴に近い声を覚えて
います

腰から下は血だらけだったそうです

弛緩出血です

それから再び手術室へ止血と輸血

産んだ子供の顔も見せられず三日間 看護師さんと産科医が行ったり
来たり、大量の出血と言われたようですが 看護師さんからは

「魔法の薬を使ったの、薬が無かったら死んでたよ」と話されたとき
違和感は在りましたが医療現場に うとい 私には助けてもらった
ことは事実と受け止めます

つわりもひどくなく、元気な妊婦の私は出産後毎日嘔吐を繰り返し

ます

子供の一か月検診で「お母さんも血液検査してください」

そして次の日病院から「急いで入院してください」の連絡です

「非 A 非 B 肝炎です 肝機能の数値を下げる治療をしましょう。

交通事故に合ったと思ってあきらめてください」 1 番目の主治医で

す

生まれたばかりの子供から 1 0 0 日余り離されました

普通の生活には戻れましたが身体の倦怠感は消えません

1 9 9 2 年実父が肝臓がんで亡くなりました

父の主治医が「お父様から娘の肝臓を見ていただきたいと頼まれま

した」と名刺をくださいました

大学病院は田舎暮らしの私が簡単に診察などには通えず、

嫁ぎ先には大学病院に行きたいなどと言えない環境

足踏みしながらやっと 2000 年の 4 月に名刺片手に第三内科を尋ね

ました

「立派な C 型肝炎です なるべく近い病院を紹介します」

出産後 1 3 年通院していた地元の病院から離れました

3～4 か月ごとに肝機能とエコーで慢性肝炎の経過を続けます

2006年新聞や報道で肝炎患者の訴訟が広まったころ 出産した病院にカルテの存在と止血剤の有無、輸血の量を問い合わせました
しかし 「当院はその薬を使っていません。出産から10年以上過ぎてますのでカルテは在りません」病院長自らハッキリ答え「肝炎の治療は当院でも出来ますよ」の言葉は受け入れる事はできませんでした

8年お世話になった2人目の主治医は「4月からインターフェロン治療に一部助成がはじまるので治療をしてみませんか？」と

2008年に薦められます

それと同時頃 2年前に止血剤を使用否定していた出産した病院から 「フィブリノゲン製剤を使用していました」の通知が届きます
なんで今頃？です

そして

インターフェロン治療の3人目の主治医に代わります

過酷な治療でした 毎週注射を48週投与、ウィルスが消えない時はさらに24週続けます

様々な副反応も体感しながら72週やり遂げたときはすでに体型も
家族関係も危うく、職場も離れました

「治療前、出産前の自分に戻るためにさらに72週後に通院卒業だよ」

3人目の先生は目標を提示、3年の月日を過ごしました

不運は次々起こります

治療卒業目前 東日本大震災、海辺の私の町は壊滅状態になりました

出産から治療まで 生まれたばかりの子供と治療のため育児から離れた時の悲しさ、毎回の通院治療費用のやりくり、インターフェロン
治療鬱の数年、一緒に乗り越えてくれた夫を震災で亡くしました
でも

今は元気です

和解成立、ウィルスは排除できました

ただ 肝臓の繊維化はなかなか改善せず、年3回のエコー検査とウィルス検査は続けています

主治医は 考え方、生き方をアドバイスしてくれる4人目鈴木ヒロシ先生に変えました

SVR 後の生活と食事などこれからの原告患者の皆さんに考えて欲しい

いこと 提案や相談に乗ってくださいます

未だウィルスと戦っている方、治療が間に合わなかった方、まだ
C 型肝炎とわかってない方 生き方を変えられた私たちは この怒
りを誰にぶつけたらいいのでしょうか！

勉強不足の私は

沢山の薬害被害者の皆さんとの接点を大切にしていこうと思います
生きてるから言いたいことは言い、伝えたいことは伝えたいです